接触場面における日本語母語話者と中国人学習者の表現使用について
ー助言の方法と助言の受け止め方ー

許夏玲
東京学芸大学留学生センター

１． はじめに

日常会話では、助言をすることは話し手の単なる情報伝達だけでなく、相手への関心・仲間意識を示したりするなど、より円滑な人間関係を図るためにも使われている。しかし、Brown & Levinson（1987）でも述べられているように、人間は基本的欲求の一つとして「ネガティブ・フェイス（negative face）」[1]を持っている。従って、助言をすることは、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないというマイナス方向に関わる欲求に反している言語行動であるとも考えられる。話し手が助言するという状況におちいる際、どのようにすれば、相手のフェイスを脅かさず、失礼にならないように助言することができるのだろうか。一方、助言を受ける側では、相手とのコミュニケーションをスムーズに維持するように、どのように助言を受け止めればいいだろうか。このような視点から、接触の場面における母語話者と学習者の助言表現の使用実態を明らかにすることが、日本語学習者のコミュニケーション能力を向上させるために必要であると思われる。

本研究では助言を「話し手が聞き手のことを思い、ある事態を望ましい結果へと導くために、聞き手にとって役に立つと思われる情報を提示する、あるいは、ある行為を遂行する（遂行しない）ことは聞き手にとって良いこと、聞き手の利益になることだと信じ、聞き手にすすめる行為である」とする。助言の際に使われる表現に関し、筆者は 6 冊の初中級レベルの日本語教科書[2]を調べた。今回調べた 6 冊の日本語教科書に掲載されている助言の表現は 23 例あった。「～ほうがいい（んじゃない）」は最も多く、17 例、「～たら（どうですか）」は 4 例、意見や事実表明（「そんなに気を使わなくても、大丈夫ですよ。」『実力日本語』p.32、「お急ぎにならないと……」『IMJ』p.218 ）は 2 例だった。このように、助言の表現として授業で多く使われるのは、主に「～ほうがいい」と「～たら（どう）」であることがわかる。

---

[1] Brown & Levinson（1987）では、もう一つの基本的欲求は「ポジティブ・フェイス（positive face）」、すなわち他者に理解されたい、好かれたい、認められたいというプラス方向に関わる欲求であるとしている。
[2]今回、筆者の調べた日本語教科書は以下のものである。
『げんき』Ⅰ　ジャパンタイムズ / 『現代日本語コース中級Ⅰ』（IMJ）名古屋大学出版会/ 『実力日本語』（下） アルク/ 『ながぬま 25』　財団法人言語文化研究所/ 『はじめのいっぽ』　スリーエーネットワーク/ 『みんなの日本語』初級Ⅱ本冊　スリーエーネットワーク

しかし、日常会話では上記のような助言の表現が実際どのように、かつ、どのぐらい使われているのかを調べる必要がある。また、このような調査から初中級レベルの中国人学習者の助言表現の使用実態からは母語からの転移がうかがえる。助言の場における中国人と日本人の表現使用の違いも解明できると思われる。

２． 調査対象及び方法

今回、収集した会話データは、日本人母語話者と中国人日本語学習者のペア会話である。うち、初対面のペアは 7 組、友達のペアは 7 組である。２種類のペアを編成したのは、初対面の場面と友人の場面における助言表現の使用の違いを見るためである。今回の協力者は全員学生、年齢は 20 代～40 代である。中国人日本語学習者の日本語学習歴は 5 カ月～7 年、滞日期間は 5 カ月～2 年半であるが、日本語会話能力は中級レベル程度までのものと判断される。わずか 20 分の会話の中では助言表現が使われないおそれがあるため、会話のテーマとして、その場で、中国人側に「日本での留学生活について」、日本人側に「中国への旅行について」を与え、相手に助言するように指示した。

また、調査対象を日本人母語話者と中国人学習者ペアの会話にした理由は、助言する状況に置かれる際、中国人学習者の助言表現の習得状況と母語からの転移の影響の有無を見るためである。[3]なお、日本人母語話者と中国時学習者ペアの会話を通して、母語話者対学習者の接触場面における助言表現の使用実態もうかがえると期待される。

３．会話データに基づいた分析の結果

各組の 20 分（合計 280 分）の会話データを考察した結果、前述の日本語教科書に掲載されている「～ほうがいい（んじゃない)」、「～たら（どう)」のような助言の表現は、実際の助言の場面ではそれほど使われていないことがわかった。助言と判断される 36 例のうち、「～ほうがいい」4 例 , 11%（内訳：初対面中国人 2、友人日本人 2)、「～ばいいじゃん」1 例 ， 2.7%（友人日本人）しか現れなかった。（紙面の都合上、長い用例文は発表の際、口頭で説明する。）

今回の会話データでは、事実表明[4]のものが 24 例 , 66%（内訳：初対面日本人 1、初対面中国人 9、友人日本人 12、友人中国人 2)、最も多かった。本来なら、助言は目上から目下に対して

---

[3]黄（2000）では、テレビ番組から収集した資料でよく用いられている助言の表現を選び、４つの年齢層の男女日本人母語話者（お互いに知っている）を対象にアンケート調査を行った。調査の結果、男性では「～たら」「～しろ（よ)」「～ほうがいい」が多く使われ、女性では「～（ん）じゃない（か)」「～たら」「～ほうがいい」が多く使われることがわかった。初対面の場合と、母語話者対学習者の接触場面に関しては考察はなされていない。

[4]本研究で言う「事実表明」とは、助言の状況に置かれている際、話し手が聞き手にとって最大の利益になる情報を、望ましい結果へと導く条件として、聞き手に提示するが、聞き手がその条件を受け入れてくれるかどうかの最終的な判断は聞き手に任せるときに使われる表現である。

何かをすすめる、または、仲間のような対等な立場で相手に何かをすすめるときに使われることが多いと思われる。助言には力の関係（上下）と心的距離（親疎）との関わりがある。助言の使用例数を見ると、初対面の場合、日本人母語話者は知らない相手の私的な領域に立ち入らないように助言を控えているという傾向が見られる。しかし、友人同士の場合になると、サークルの知り合いや留学生のチューターやゼミの仲間である日本人の母語話者は相手との距離が若干縮まるため、相手に直接行動を指示するより、事実表明のしかたで相手に何かをすすめようとする。

一方、中国人学習者のほうは、知らない相手ではあるが、相手に積極的に友好関係を見せようとするため、自分の意見や情報などを助言の根拠として取り上げ、相手にすすめようとする傾向がある。しかし、友人同士の場合は、今回のデータにおいてなぜ助言の使用例数が少なかった。そのはっきりとした理由はまだわからない。一つの可能性としては、今回の会話データの協力者は年齢の近い友人同士であっても､多くはチューターと指導留学生の関係であるため、やはり力の関係から考えると、指導留学生が自分のチューターの前で話を控えたりし、助言の使用例がそれほど現れなかったことが考えられる。

次に行動指示のもの、12 例 , 33% （内訳：初対面日本人 1、初対面中国人 9、友人日本人 2、友人中国人 0）という割合で多く現れた。用例数を見ると、日本人母語話者は相手に何かをすすめる際、相手に取ってほしい行動を指示することをなるべく避けようとしている傾向がみられる。初対面中国人学習者は相手に積極的な友好態度を見せ、相手を自分の仲間として受け入れようとするため、「（ぜひ）～てください」「（ぜひ）～ましょう」「～ほうがいい」という表現が多く使われることがわかった。「～ましょう」の表現は中国語の「**我们就～吧**」という表現の影響を受けたと考えられる。その他､「～てください」の表現が多く使われるのは中国語の「**请～**」「**你一定要～**」という表現の影響によるのであろう。友人中国人学習者の行動指示の用例は見あたらなかった。理由としては、友人関係であっても、中国人学習者は自分のチューターである相手の前で表現を控えており、チューターも自分の知っている学生の前で会話の主導権を握って会話を進めていたため､たまたま中国人学習者の用例は現れなかったことが考えられる。今後、友人同士のデータに関する考察をさらに進めていきたいと考えている。

４．　助言の受け止め方

今回、調べた 6 冊の日本語教科書に掲載されている助言の受け止め方は、主に次の 2 種類がある。

(1)　はやし：はやくよやくしたほうがいいですよ。きょうとはいつもこんでいますから。

マリー：そうですか。じゃ、これからすぐでんわします。　『ながぬま』（積極的な受け止め）

(2) 張：（略）でも、鈴木さんはヘビースモーカーだから、できたら火事の原因になる寝たばこはしないほうがいいですよ。

鈴木：そうですね。　わかっていますが、なかなかやめられませんね。　『実力日本語』

（消極的な受け止め）

上記の例のように、「積極的な受け止め」は、助言を受ける側が相手の助言を積極的に受け止め、相手の助言通り、自分の認識を変更したり、何かの行動を取ったり、やめたりするときに見られる手段である。それに対し、「消極的な受け止め」は、助言を受ける側が相手の助言を直接断るより、「そうですね」「うん」などのような肯定的な表現で相手の言ったことをいったん肯定してから、自分の反対の意見や断る理由を提示するときに用いられる。

収集した会話のデータを考察した結果、上記のような助言の受け止め方以外、保留的な受け止め方が用いられる例があった。本研究で言う「保留的な受け止め」とは、助言を受ける側が相手からの助言を積極的に受け止めるか、婉曲的に断るかといった反応を見せず、助言に対する返事を保留するときに用いられる手段である。これは、助言を受ける側が助言を受けるかどうかをまだ十分に判断できていないからであろう。「そうですか↑」「ほんと↑」のような表現を使用したり、相手の言ったことの一部を引用して繰り返して質問をしたりするという形で「保留的な受け止め」が用いられる傾向が見られる。

５．今後の課題

今回、収集した会話データにあまり現れなかった中国人学習者対日本人母語話者（友人同士の場合）の助言表現について、今後さらに会話データを増やして、より広い範囲で考察を進めていきたいと思う。

引用文献

Brown, P., & Levinson, S.(1987). Politeness : Some Universals in Language Usage. Cambridge University Press, Cambridge.

Searle, John R. (1969). Speech Acts. Cambridge University Press, Cambridge.

黄郁芳（2000）「日本語のアドバイス表現について」平成 12 年度修士学位論文　名古屋大学大学院国際言語文化研究科